

妹紅がいっぱい！

PS  $\beta$

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

上白沢慧音は、夢を見ていた。

妹紅がいっぱい！

目

次

1

# 妹紅がいっぱい！

妹紅が5人いる。

不機嫌そうな表情の妹紅。

控え目な態度の妹紅。

照れている妹紅。

寂しそうな表情の妹紅。

そして、泣いている妹紅。

まずは、不機嫌そうな表情の妹紅の元へ行つてみた。

「誰？ 私今、すぐ機嫌が悪いんだけど」

その妹紅は、私のことを知らなかつた。

更に、話し方も違う。

それらの理由と、これが夢であるということから、彼女は昔の妹紅であると分かつた。

いつも一緒にいる人物が自分を知らないというのは、妙な感覚だつた。

何故機嫌が悪いのかを尋ねてみた。

「なんで初対面のあなたなんかに話す必要があるの？」

「私は先生をやつている。お前の力になれるかもしれないぞ」

それに、私にとつては初対面ではない。

そんなことは言えないのだが。

「： 先生さんは、自分のことが嫌いになつたことある？ 私はある。関係ない人を殺して、復讐にも失敗して：： こんなに罪に塗れてるのに、死ぬことも出来ない。そんな自分に腹が立つてるの」

聞いたことがある。妹紅が不老不死になつた時の話だ。

今でこそ受け入れているかもしけないが、この年の少女には受け入れ難いことだつただろう。

しかしそれは、長い年月をかけて受け入れなければならないこと

だ。

長い、永い年月が必要だ。私の出る幕ではない。

私に出来ることは……彼女の罪の意識を変える事、か？

「確かにそれは、罪かもしない。なら、それは償わなければいけない。分かるか？ 罪と償いはセットなんだ」

「分かつてる。だから私は、死のうとしたのに……」

「それは違う。死ぬのは償いなんかじゃない。そんなのはただの逃げだ。お前はただ、逃げ道がなくなつただけに過ぎない。前に進むことは出来るはずだ。幸いにもお前には、時間はたっぷりあるんだろう？」

？」

「……そうか……そうだよね。ありがとう、先生さん」

そう言うと彼女は、少し笑みを浮かべて、消えた。

あと4人の妹紅がいる。

次に、控えめな態度の妹紅の元へ行つてみた。

「や、やあ……慧音、だつたつけ？」

この妹紅には見覚えがある。

まだ私達が会つて間もない頃だ。

「覚えていてくれて嬉しいよ。元気にしてるか？」

そう、人間から距離を置いて暮らしていた妹紅を、私が見つけたんだ。

今とは比べ物にならないくらい、私に気を使つていて。

というよりも、私とも距離を置こうとしているようだつた。

「なあ……慧音はどうして、私なんかの所に来るんだ？」

ああ、確かにこんなことを聞かれたような気がする。

なんて答えたんだつけ……？

「……妹紅が心配だから、つて理由じゃダメか？」

思い出せなくてそう答えたが、確か前もこう答えたような気がす

る。

「でも私は、人間の道から外れてるんだ！だから——」「私も、人間の道から外れてる」

「…え？」

妹紅が固まる。

まるでそんなこと考えもしていなかつたのだろう。

不思議なことに、ここからは考えるよりも先に言葉が出た。

「私は、半分人間で半分妖怪なんだ。人間として良い扱いも悪い扱いも受けたし、妖怪として良い扱いも悪い扱いも受けた。だからって、すべてを知っている訳じやないが…それでも、分かることはある。妹紅の…寂しさとか。私に出来ることなら、その寂しさを少しでも埋めたいんだ」

：一気に喋りすぎただろうか。

と、考える間もなく妹紅が口を開く。

「寂しい、か…一人でいるときはそんなこと気づかなかつた。それが当たり前だと思つてた。それが私の罰なんだと、勝手に思つてた。もし、もしよければ…また、来てくれ。何度も」

妹紅は少し心を開き、そして消えた。

残つているのはあと3人

「あっ、慧音！おかえり！」

3人目の妹紅は、私が一番よく知る妹紅だつた。

「どうしたんだ？そんな嬉しそうに」

嬉しそうというか、照れているように見える。

「ふふふ…えいつ！」

いきなり抱き着いてきた。

「うわっ！」

妹紅にしては珍しい行動である。

「私は慧音のことが好きだー・どこの誰よりも大好きだ！」

私のお腹に顔を押し付けながら叫んだ。

「妹紅… ありがとう」

「慧音は… 私のこと好き？」

「ああ」

「どこの誰よりも？」

「ああ」

「慧音…」

妹紅は、一際強く私を抱きしめてきた。

私も抱き返す。

「…ずっと、一緒にいようね」

その言葉に返事をする前に、妹紅は消えてしまつた。

残り2人。

次の妹紅は、寂しげな表情をしていた。

「なあ、慧音。ちょっといいか？」

何やら大事な話のようだ。

「もしも… もしもの話だぞ？もしも慧音が… 死んでしまつたとき。その時、私はどうなるんだろう… 悪いんだ。どうすればいいのか分からなくて」

…

私も、考えたことがある。

もちろん解決策が見つかるわけもないし、私がどうにができるものでもなかつた。

「… 大丈夫。きっと、いつか私みたいな奴が見つかるさ。だって、探すための時間はいくらでもあるだろう？」

「… そんなの…」

ああ、何も解決してない。

けれど、私にはそれ以上のことは言えなかつた。

「安心してくれ。私が生きている間、私は妹紅を守ると誓うよ」

妹紅は無言で私を抱きしめ、そして消えた。

最後の1人は、泣いていた。

両手を地面に叩きつけて膝を付き、大声で泣いていた。

なんとなく、予想は付いていた。

そして、直前の妹紅との会話内容。：

「私はつ……！私はどうすればつ……！」

妹紅は両手で顔を覆う。

夢から覚める。

不思議なことに、夢の内容はすべて覚えていた。

覚えていたくない」とまで 魚明は  
起き上がるとして、ふと気が付く。

… そうか。そういうことだつたのか。

あれは、けじめだ。私の、妹紅に対するけじめ。

心の中で呟く。

結局私は起き上がれずに、再び目を閉じた。

でも…

私はっ！私はどうすればっ！！